

# イノセンスとノン・モラル

— 転形期日本の子ども・若者たち —

豊 泉 周 治

群馬大学教育学部社会科教育講座

(1999年9月3日受理)

## Innocence and Non-moral

— Childhood and Youth of Japan in Transition —

Shuji Toyoizumi

*Department of Sociology, Faculty of Education, Gunma University*

*(Accepted September 3, 1999)*

### はじめに

2年ほど前のことになるが、1997年の神戸連続児童殺傷事件の衝撃の後、一人の若者がテレビのニュース番組で「なぜ人を殺してはいけないのか」という主旨の問いかけをして、同席していた人びとをあわてさせたことがあった。大江健三郎は後日、この件にふれて、「まともな子供なら、そういう問いかけを口にするのを恥じるものだ」と断じた<sup>(1)</sup>。だが、はたしてそうであろうか。神戸事件を経験した私たちにとって、その問いかけは一人の若者の逸脱した発言として聞き流すには、あまりに深く私たちの心に突き刺さった。その後、たてつづけに報じられたナイフを携帯する中学生たちの殺傷事件の記憶も生々しい。神戸事件のときの「透明な存在」という言葉と符合して、この唐突な問いかけは、もっとも深刻なレベルで今の若者たちのアイデンティティ危機を私たちの社会に突きつけているのではないか。私には、この若者の問いかけによって、つかみにくかった私たちの時代の心臓部が突然に射抜かれたような思いがある。

21世紀を迎えようとする今、日本社会は深い混迷のなかで、行方もわからないままに激しく疾

走しているように見える。ここ10年の間に、久しく自明のことと考えられてきた多くのことが崩壊し、いつの間にか日本の社会は根底からくつがえってしまったかのようにさえ感じられる。かつて花田清輝は中世から近代へと激しく移り変わるルネッサンス期に寄せて、歴史の根底的な変化の時代を「転形期」と呼んだが、おそらく私たちもまた同様の根底的な変化の時代に生きている。「近代化」とその後の安定の時代がいよいよ終わり、いわば「近代からの転形」の時代に入ったと言ってよいであろう。副題の「転形期日本」とは、そうした根底的な変化の渦中にある日本社会のことを意味する。そして、かつてエリクソンが論じたように、そうした変化の最前線に立って未来に臨む若者は、それだけに深く時代の変化にさらされ、アイデンティティの危機にさらされることになる。

私は、拙著『アイデンティティの社会理論』において、今日の子どもや若者たちを襲うアイデンティティ危機のなかに、この根底的な変化の時代が映し出されるのを見てきた。若者が自己のアイデンティティを確立し難いということは、そのまま近未来の社会を立ち上げ難いということであり、社会の再生産そのものの危機を意味する。若者たちにとって、言いかえればそれは、この社会における生き難さであり、みずからの生きる社会の困難さでもある。その困難が、「なぜ人を殺してはいけないのか」という根元的なモラルの問いかけとなるのではないか。それゆえ灰谷健次郎と滝谷美佐保が大江を批判して述べたように<sup>(2)</sup>、若者の発言を「まとも」ではないノン・モラルの問いとして切り捨てるのではなく、そのような問いを発する若者のところにおいてゆく想像力こそ、この時代の変化に向き合おうとする「知識人」と大人たちにとって必要とされるであろう。再生への糸口もまたそこにあるはずだからである。

拙著で私は、子ども・若者たちのアイデンティティ危機の深まりを分析するとともに、他方では臨床の場で語られ始めた危機からの「再生の物語」のなかに、社会を再生させる「ライフスタイルの政治」の可能性を示唆した<sup>(3)</sup>。その可能性は今も失われたわけではない。だが、転形期の変化は急である。ここ1年ほどの間に、ノン・モラルへの批判はますます声高になり、小林よしのりの『戦争論』に見られるように、再び「国家の政治」の台頭を求める気分も顕在化してきた。居丈高に「国のために」死ぬるか、と問われるとき、たしかにそこでは「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いは沈黙することになる。転形期の社会がまた一つ新たなステップを踏み、それだけにまた変化の争点も煮詰められつつあるように思える。若者が突きつけた根元的なノン・モラルの問いは、そうした変化の争点を映し出しているのである。

この小論では、拙著の考察を引き継ぎつつ、芹沢俊介の「イノセンス」論と加藤典洋の「ノン・モラル」をめぐる議論を手がかりとして、今や「死」をめぐる局面にまで煮詰められた若者のアイデンティティ危機の問題を、目下の転形期における根底的な社会変化の意味、あるいはそこから導き出される選択の可能性に照らして考えてみたい。

## 1. イノセンスという視点

「なぜ人を殺してはいけないのか」——難問のようだが、実は人間社会の存立という点から考えるなら、理由ははっきりしているとも言える。もしそうでなければ人間の社会そのものが成り立たないからである。そのことは逆に「殺してもよい」理由を考えてみればわかる。死刑制度にせよ、戦争にせよ、仮にもそれらは社会ないし国家を成り立たせ、存続させるためのものだ。それゆえ、「なぜ……」という問いを發した若者は、そうした社会の存立を受け入れない、あるいは社会は成り立たなくてもよい、と述べたということになる。この質問が「根元的なモラル」の問いかけであるというのは、そういうことである。そして、だからこそ大江健三郎が「まともな子ではない」と述べたように、問いを發した若者のノン・モラルが批判されることになる。

だが、大江の応答が批判を受けたように、若者のもとにおいて考えるなら、発言はノン・モラルに短絡されるべきではないだろう。番組に同席した灰谷健次郎は、「きわめて健康で明るい若者でした」と印象を述べ、「根源の疑問に手探りして、あのような発言に至ったものと思われます」、と若者を弁護している。また滝谷美佐保は、「末世の感の強い今の時代に、その人がまともに生きようとすればするほど、そしてユーモアと希望を失うまいとすればするほど、この問いを切り捨てることはできないのではないだろうか」、と述べている。では、私たちは若者の問いかけから何を聞きとるべきなのか。

それはノン・モラルではなく、芹沢俊介の言う「イノセンスの表出」なのではないか、というのがここでの考えである。問いかけた若者は、そのとき、より正確には「人を殺していけない理由がわかりません」と述べたのであって、けっして「人を殺してもよい」と言いたかったわけではないだろう。若者は神戸事件の衝撃のなかでこの「根源の疑問」に捕えられたのだが、しかし大人たちはいっこうにその疑問に答えてはくれない。そこに問いが發せられた。言いかえれば、この社会は「人間の社会」として成立していないのではないか（自分には「居場所」がない）。そして、そのことについて「自分には責任がない」（「このままのかたちでは現実引き受けられない」と。若者は、「なぜ……」と発言することで、そのように大人たちに問いかけたのではないか。

ところで、「イノセンスの表出」と言ってもすぐには理解しにくいであろう。ここで引いた「イノセンス」という言葉は、芹沢俊介の子ども論のキーワードであり、その主張は「子どもは根源的にイノセンスである」という基本認識から始まる<sup>(4)</sup>。英和辞典で「イノセンス」を引くと、「無罪、無垢、無邪気……」とあるが、芹沢はいわばその言葉の存在論的意味を突きつめて、カタカナ書きにして独自の意味でもちいている。芹沢によれば、イノセンスとはこの世に生まれた子どもの根源的受動性の意味であり（I was born という受動態の表現に見られるように）、それゆえに「自分には責任がない」「このままのかたちでは現実引き受けられない」という心的場所（心のあり方）であるという。たとえば、誰にも覚えのあることだが、親から厳しく責任を説かれて、思わず「誰が産んでくれて頼んだよ」と言い返すとき、それがイノセンスの表出である。した

がって成熟して大人になるということは、子どもがイノセンスをみずから解体し、「自分には責任がある」と世界を引き受けること、自分を構成する世界を肯定して選び直してゆくことである、と芹沢は言う。そのためにイノセンスは子どもによって表出され、親＝大人によって肯定的に受け止められなければならない。子どもは自分が肯定されていると感じることで、はじめてイノセンスを解体し、世界を引き受けることができる、というのである。

芹沢の子ども論＝イノセンス論は、実は〈子ども〉暴力論である。今や噴出している多くの子ども問題は、イノセンスの解体、つまり世界を肯定し選び直すことに失敗した子どもたちのイノセンスの表出、「このままのかたちでは現実を引き受けられない」というメッセージだというのが、その基本主張である。そのメッセージが、現代の子どもたちが暴発させる自他への諸々の暴力となって表れる。たとえば拒食症や過食症は自身の身体と性の選び直しに失敗した子どもの自傷行為であり、家庭内暴力は親の選び直しに失敗した例であるという。芹沢は、「子どもは根源的にイノセンスであるゆえに、それから自己を解放するためにあらゆる暴力、あらゆる悪を行うことが可能性として許されている存在である」、とも言う<sup>(6)</sup>。その主張は、神戸の事件の解釈にも適用される。酒鬼薔薇聖斗は、「犯行声明文」で「今まで自分の名で人から呼ばれたこともない」と訴えて、「透明な存在であるボク」の存在をかけて犯行に及んだ。つまり事件は、自己の存在（イノセンス）を一度も肯定されなかった者の、〈このままのかたちでは〉現実を引き受けられないという、酷薄な暴力にまで及んだイノセンスの表出だというのである。

もとより、だからといってイノセンスの議論は、子どもたちの暴力をただ肯定し、酒鬼薔薇聖斗の犯罪を免罪しようというわけではない。問題は、酒鬼薔薇聖斗を生んだこの時代の「暴力の発生を問うこと」、そして「暴力から自由になる道筋」を突きつめることである。「そうでないかぎり暴力の契機はいつまでたっても残されたまま」、だからである<sup>(6)</sup>。

たしかに現代の日本社会が、とりわけ若い世代において、かつてないほどに暴力への傾斜を深めているという実感は強い。オウム事件や神戸事件のような衝撃的な暴力が特異な犯罪であることは間違いないが、それらを頂点として、ナイフをもつ若者の暴力事件、キレル若者やムカツク子どもたち、いじめや校内暴力の日常、そして学級崩壊……と、子ども・若者たちの世界では暴力の文化が蔓延し、拡大しているように見える。文部省が公表した小・中・高校の児童・生徒についての「問題行動調査」によれば、1998年の「暴力行為」は前年度を2割強上回って、過去最高を更新した。対教師暴力と生徒間暴力が前年度比で2割弱の増加、器物破損は4割も増加した<sup>(7)</sup>。また、教科書出版社の第一学習社が高校3年生約1000人を対象に行った調査では、「今の日本は平和だと思いますか」という質問に「平和だと思う」と答えたのは40%で、5年前の半数になっているという<sup>(8)</sup>。子ども・若者たちの世界では、大人たちの想像以上に、暴力と戦争のリアリティが増しているのがわかる。「なぜ人を殺してはいけないのか」という暴力的な問いかけは、それゆえ格別に特異な問いかけなのではなく、この若者たちのリアリティに照応していると見た方がよい。そして芹沢のイノセンスという視点は、この問いかけに応じるために必要な「暴力の発現についての理路」を可視的なものとしている。

一般に、「子どもの無垢（イノセンス）」という観念が17世紀から18世紀にかけて、近代ヨーロッパにおいて誕生したことは、F・アリエスの『〈子供〉の誕生』<sup>(9)</sup>以来よく知られていることである。そうした「子ども」の観念、子ども期への配慮にしたがって、近代の学校（教育）と家族（愛情）が形態化された、というのがアリエスの社会史の主張である。その点からすれば、ここでのイノセンス論は、近代という時代の根底的な変化、小論で言う「近代からの転形」にかかわっていることがわかる。つまり芹沢の言うように、イノセンスの表出が肯定的に受け止められないなら、あるいはその表出が封じられるなら、さらには表出の欲求までが空洞化されるなら、事実上、それは近代という時代を形象化した「子ども期」が剥奪されること、「子ども期の喪失」を意味するであろう。そのとき、子どもは世界を引き受けることができず、表出されずに内向したイノセンスは過剰に蓄積されて、自他を殺す暴力となる。近代という時代が、かつてその誕生をまず子ども期への配慮に宿したとすれば、今や近代からの転形の危機は、まっさきに子ども期の危機として現出した、ということになる。

このような子ども期をめぐる理解がいかに「時代的なもの」であるかは、市民・NGOの会が国連子どもの権利委員会へ提出した統一報告書『“豊かな国”日本社会における子ども期の喪失』<sup>(10)</sup>からも、具体的に知ることができる。近代とともに成立し、近代を形象化したイノセンスの観念（子どもの無垢）は、転形期の日本社会において、今やこうして暴力の形式に形骸を残して剥奪され、失効しつつあると見てよいであろう。

## 2. 負債としての自己

今、日本社会において子どものイノセンスが剥奪され失効しつつあるとすれば、代わって子どもはいかなる観念を負うことになるのであろうか。『敗戦後論』を書いた加藤典洋の指摘が興味深い。加藤によれば、イノセンス（無罪）の反対は有罪であり、罪の原義は負債であるという。つまり、「人間にイノセンスを認める考え方とそれを認めない考え方の違いは、生まれた時、負債なしか、負債ありか、ということになる。ここに対立する二つの考え方の根がある」<sup>(11)</sup>、というのである。

「生まれた時、負債なしか、負債ありか」——今の日本で考えるなら、たしかに「負債あり」と言わざるをえない状況がある。かつて子どもは「生まれる（be born）」もの、「授かる」ものだったが、久しく以前から子どもは「産む（give birth to）」もの、「生を与える」ものとなった。さまざまな生殖技術が発達した今、諸々の受胎調節に始まり、人工授精や体外授精、胎児診断や男女産み分けなど、何段階もの「産む」選択と決断によって、子どもに命が「授けられる」。その点で、子どもは根源的に生を贈与され、それゆえに「負債」を負う存在になったと言える。しかも産業化の進展にともなって、かつて農業社会において重要な「生産材」（農業の担い手）であった子どもは今や高価な「消費財」（楽しみの対象）となり<sup>(12)</sup>、たとえば誕生と同時に「学資保険」に加入するように、文字どおり大きな「負債」を要する存在に変わった。だから、現に少子化と

いう選択が進行するなかで、少なく選択された子どもに「返済」を求める親の期待はますます大きくなっている。

このような状況における子どもの自己を、ここでは芹沢のイノセンス論に照らして、「負債としての自己」と呼ぶことにしよう。その自己は、もはやイノセンスを表出できないがゆえに、あるいはマイナスのイノセンスを負荷されるがゆえに、世界を引き受けることができない自己である。すでに「なぜ人を殺してはいけないのか」という若者のノン・モラルの問いを手がかりに、受容されないイノセンスの表出が暴力の発生となることを見てきたが、もとよりそれは一連の問題の頂点で発生する事態であり、当然ながら、誰もが直接に自他への暴力に駆り立てられるわけではない。では、より広く、現代の若者文化一般のレベルで考えるなら、「世界を引き受けることができない」ということは、どのような問題なのであろうか。

そこで参照したいのが、若者の「徳性」に関する千石保の分析である。千石は現代日本の若者文化の転換を「まじめ」の崩壊と呼び、そのノン・モラルを批判的に論じているのだが、ここで興味深いのは、その分析結果から世界を引き受けられない若者の平均的な自己像がリアルに見える点である。千石によれば、日米高校生に自分の「いいところ」を20項目にわたって自己評価させ、結果を因子分析したところ（「徳性に関する調査」1992年）、日本の高校生には顕著な特徴が浮かび上がったという。なんと、析出された3因子、つまり千石の言う「まじめ」因子（責任感、忍耐、知的、自主性、自立心、公正、正義感、誠実、勇気など）、「思いやり」因子（思いやり、親切で愛情深い、協調性、明るく朗らかななど）、「独立・創造」因子（個性が強い、習慣にとらわれず自由、創造的）のすべてにわたってマイナスとなるグループが全体の約3割を占めて、最大多数派になったというのである<sup>(13)</sup>。「まじめ」でもなく、「思いやり」もなく、「独立・創造」的でもないという、自分の「いいところ」をまるで評価できない若者が日本では最大多数を占めることになる。一方、3因子ともプラスのグループは1割4分であった。これに対してアメリカの高校生の場合、析出された因子は「思いやり」「自立」「個性派・創造派」で、内容的にやや異なるが、日本の場合とは正反対に、3因子すべてにプラスのグループが約3割で最大多数派であり、一方、すべてにマイナスのグループはなかったという。

あまりの対照的な結果に、千石は日本の高校生の「徳性」の低さを嘆き、アメリカの高校生の人格的なレベルの高さと比べて、ブルセラや援助交際の広がる日本の「おかしな社会」「おかしな高校生」の現実を憂いている。そして、「正義」や「モラルの復権」が大切であると主張する。だが、この調査が「いいところ」（「徳性」）の「自己評価」であることを冷静に考えるなら、そのように短絡する必要もないだろう。自信満々に「正義」を標榜する者よりも、自分の正義感に疑いを抱く者の方がむしろ「徳性」が高い、という判断も当然、成り立つ。ただ、この分析結果から冷静に読み解かなければならないのは、日本の多くの高校生が否定的な自己像、つまりマイナスに評価された「負債としての自己」をかかえて、一步「引いて」生きている現実である。どこから「引いて」いるのかと言えば、一言で「世界から」と答えたい。そこに「世界を引き受けられない」若者たちの、多数派の自己像が浮かんでくる。

実は千石が「まじめ」「思いやり」「独立・創造」と仮に命名した3因子は、理論的にも見ても興味深い関係性をもっている。「まじめ」という第一因子は、その項目を見ればわかるように、自分の外の客観的な世界（自然ばかりでなく社会や文化も含めて）にかかわる自己のあり方（姿勢）である。同様に「思いやり」という第二因子は、他者の内面（主観性）にかかわる自己のあり方、そして「独立・創造」という第三因子は自分自身の自我にかかわる自己のあり方である。つまり日本の高校生の多数派は、外の客観的な世界からも、他者の主観的な世界からも、みずからの自我の世界からも、一步「引いて」、その自己に「世界」（社会理論で言う「生活世界」<sup>(14)</sup>）を引き受けることなく、空虚な世界に生きているのである。しばしば指摘されることだが、ここにも希薄な現実感のなかで、孤独感をかかえながら、自信なく不安に生きる若者の姿が見えてくる。もとよりそのことは直ちに「ノン・モラル」だとは言えない。だが、たとえば「引きこもる若者たち」<sup>(16)</sup>の増加を考えてみても、そこには現代日本の若者の「自分探し」や自己形成にまつわる困難や病理、総じて「アイデンティティの危機」状況が地続きになっていることがわかる。

1990年代の初めに、中島梓が「コミュニケーション不全症候群」という独自の時代診断を下して分析をほどこしたのも、そうした現代日本の若者の危機的様相であった。中島は、「おタク」とダイエットそしてJUNE的世界（美少年の同性愛をテーマとする小説・漫画）という、現代の若者たちの特異な文化現象を解説して、「現代がコミュニケーション不全症候群の時代である」と喝破した。「私たちは本来耐え得る以上の異常な距離感の喪失のなかにおかれ、その結果としてありうべき健全な対人知覚を近い方へも遠さの方に向かって失ってしまっている」<sup>(16)</sup>、というのである。中島は、自己の殻に引きこもってもはや対人関係のなかに居場所を見いだすことのない「おタク」少年たち、「選別される性」の立場から逃れるすべもなく過剰なダイエットで身を削り続ける少女たち、そして、ただ受容するだけのマゾイズムの性に自己を投射するJUNE的世界の少女たちに、そうした現実の病理を読み取っている。いずれも、異常な競争関係と選別的なジェンダー関係が支配する社会のなかで生き延びるために、社会から引きこもり、あるいは過剰に適応し、「かつてまったく当たり前と考えていたような相互的な人間関係を築くことができなくなってしまった」、致命的なまでに病んだ現代人の縮図であるという。

小論の議論に引きつけて言えば、中島が分析したのは、異常な競争と選別が支配する日本社会のなかで「負債としての自己」をかかえ、それゆえに世界を引き受けること（「居場所」を見つけること）ができず、あるいはだからこそ「受け入れられる」ために過剰に適応する若者たちの姿である。中島も言うように、コミュニケーションとは「適切な距離と自己評価を基盤として成立するもの」なのだが、ここでは相互的な人間関係としてのコミュニケーションは機能不全となり、現代社会が「人間の社会」として成立しかねる危険が描き出されている。もとよりそれは若者たちが異常だから、というわけではない。中島によれば、若者たちが自分の虚構空間に引きこもるのも、ダイエットによって摂食障害に苦しむのも、あるいは倒錯した性的世界を仮想するのも、彼らや彼女らが「病気」だからではなく、この「病んだ社会」に適応して生き延びようとするからである。生き延びるために病んだ社会に過剰に適応し、そこで無言の悲鳴とSOS（「このまま

のかたちでは現実を引き受けられない)を発していると思えばよい。それはまさに芹沢の言う「イノセンスの表出」であろう。

中島が「進行性の病気」だとしたコミュニケーション不全症候群は、90年代を通じてさらに悪化の一途をたどった観がある。近著『タナトスの子供たち』で、中島は、結局それらすべての現象はいずれも熾烈な競争原理の社会に対する無言の抵抗として、「緩慢な死」を内包した「タナトス的」症候であり、「私たちのたどりついたこの奇怪で不快なきしみをおびた社会」に潜む、「深い闇のかたち」を映し出している、と述べている<sup>(17)</sup>。「タナトス」とはフロイトの説いた自己破壊の衝動として現れる「死の本能」のことだが、今や中島は現代の子ども・若者たちを襲っている奇妙な諸現象に、「死を忘れた」資本主義の競争原理に対する多数の小さな、しかし重大な予兆を秘めた抵抗のムーブメントを認めている。「メント・モリ」——死を忘れるな、というわけだ。

「そう——私たちは滅びてゆこうとしているのかもしれないのです。『だが、なぜ滅びてはいけないのか?』——時代がこんなところまでゆきついてしまう前に、本当に私たちが発さなくてはならなかった問いは、本当はそれだったのではないのでしょうか」<sup>(18)</sup>。

中島は、このように述べている。ふり返って考えるなら、さきの若者が発した「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いは、まさにこの問いだったのではないか。

### 3. イノセンスの文化——戦争と戦後

中島梓の新著は『タナトスの子供たち』と題されたが、それがかならずしも法外な修辞とは言えないことは、すでに見てきたとおりである。子どもをめぐる多くの問題は今日、一見なにげない日常の情景なかで死と向かい合わせの関係にあり、時に生と死の境界は子どもたちによって突然に、そして易々と越えられてゆく。「死の誘惑が子どもたちをとらえはじめた、そんな気がしてならない」、と芹沢俊介は述べた<sup>(19)</sup>。あるアンケート調査の結果によると、「生まれてこなければよかったと思うことがありますか」との質問に、「よくある」「時々ある」と答えた子どもは、小学3年生34%、5年生35%、中学3年生で38%にのぼった<sup>(20)</sup>。このような自己否定の気分（「負債としての自己」）に、いつ「死の誘惑」が芽ばえても不思議ではない。これもまた、「このままでは現実を引き受けられない」という、抑制された「イノセンスの表出」である。ただし「死の誘惑」と言っても、それは「タナトス的」であって、フロイトの言う生物学的な「死の本能」ではなく、現代の社会的・文化的な病理の問題である。それは現代の日本社会において構造的に産出されたものであり、そのことを中島は「病んだ社会」への過剰適応の結果であると見た。つまり「負債としての自己」をかかえた「タナトスの子供たち」の問題は、その母胎となる現代日本社会の文化、なかんずく親たち・大人たちの文化の問題として問われなければならないのである。



下記の表は少し古い調査だが、「両親はどんな子どもだったのか」を中学生に尋ねて、中学生の自分自身についての評価と比べたものである。すべての項目にわたって大きな落差があるのがわかる。さきにふれた日米高校生の「徳性」の比較と同様のことが言えるが、ここでは親に対して自分をマイナスに評価する意識が生々しい。この時期、中学生にとって「負債としての自己」はすでにこれほどまでに顕著だが<sup>(21)</sup>、一方、親はプラスに評価され、「負債」のないイノセンスの存在であるかのように、中学生の前に立ち現れている。この親たちの文化が、ここで問われるべき問題である。

両親はどんな子どもだったのか

	子どもの頃		子どもの自己評価
	父親	母親	
友だちの間での人気	84.5	87.9	21.6
しんぼう強さ	74.6	54.3	17.6
スポーツの得意さ	74.4	47.4	34.2
約束を守る	68.9	74.0	31.7
勉強が得意	63.9	73.2	14.5
友だちに親切	53.9	87.9	34.8
まじめに掃除	36.2	51.1	22.1
学級委員になる	36.0	47.2	14.5

「とても」「まあ」の占める割合

出所：深谷昌志『孤立化する子どもたち』、243 ページ

「親によるイノセンスの収奪」という芹沢の表現があるが、ここではこの親たちの文化を「イノセンスの文化」と呼んでみよう。親たちの「イノセンスの文化」のもとで、子どもは親から教育を受け、「負債としての自己」を内面化し、そこにタナトスを宿した、というわけである。すでにこの話にはよく知られた分析モデルがある。A・ミラーの『魂の殺人』である。

ミラーは、子ども時代に親から受けた「教育」という名の虐待と自己への抑圧はその子どもの精神に深い傷跡を残し、それが後になって成長した子どもの他者への、あるいは自分自身への冷酷な破壊的暴力となって再現される、と独自の精神分析を展開した。その議論は、親子関係一般の問題であるとともに、なかんづくヒトラーとドイツ第三帝国市民によるユダヤ人虐殺を生んだ心理学的機制を明らかにするものとして、前世紀からの子どもに対する「教育」とその親たちの責任を厳しく問うものであった。「初めに教育ありき」というのがこの本の原題だが、そこで「闇教育」と呼ばれたかつての教育の基本は、要するに子どもの感情を殺す自己否定と大人への完全な依存とをめざす教育であった。たとえば、「子どもは子どもであるがゆえに尊敬されない」「従順は人を強くする」「高い自己評価は害がある」「自己評価が低ければ人に対して親切になる」…「両親も神も侮辱に耐え得ない」「両親には衝動も罪もない」「両親はいつでも正しい」、といった見解が列挙されている<sup>(22)</sup>。子どもの自己を否定し、子どもの感情を殺す親たちは「罪もなく」「正しい」とされる。そこには大人たちの「イノセンスの文化」がまざまざと浮かび上がる。そ

して、このような「教育」と暴力の連鎖は世代を越えて受け継がれ、そのことが大人たち自身によって気づかれ、悲しまれることがないかぎり、暴力の連鎖は断ち切られることがない、とミラーは言うのである。

ミラーのこの議論は、遠いかつてのドイツ帝国の話として終わるわけではない。それはそのまま今の日本において戦争と戦後の責任問題を考え、併せて子どもと若者のアイデンティティ危機を考える課題として、私たちの「イノセンスの文化」にはね返ってくる。今に続く日本の大人たちの「イノセンスの文化」は、いったい「何を悲しまなかった」ことに由来するのであろうか。

野田正彰『戦争と罪責』によれば、80年代日本の「多幸症」とも言うべき、感情の平板化した空虚な時代の気分は、戦後日本の「罪の意識を抑圧してきた文化」（「イノセンスの文化」と読み替えたい）の連続に由来するものだという。野田は、「侵略戦争を直視せず、どのような戦争犯罪を重ねたかを検証せず、否認と忘却によって処理しようとする身構えが、いかに私たちの文化を貧しくしてきたか」を<sup>(23)</sup>、元日本兵への丹念な聞き取り調査をとおして追跡した。戦時の集団に埋没し、過剰に適応し、「無邪気な悪人」となって数々の残虐行為に関与した元兵士たち。野田は多くの証言を聞きながら、「それでもなお日本兵は精神的に傷つくことがあまりに少なかった」と、ほとんどの兵士の感情麻痺について報告している。当時の陸軍病院に残されたカルテにも自分の残虐行為に傷ついた兵士の記録はほとんどなく、アメリカ兵や旧ソ連兵の戦争神経症の記録・研究とは、きわだった違いがあるという。「身体は傷ついても、こころは傷つかない不死、すなわち感情麻痺の強さ」が日本軍の「強さ」であった。「しかもこのような感情麻痺は、戦後の日本人に持続していたのではないか」<sup>(24)</sup>、と野田は問うのである。

問題は個人的であるとともに、集団の問題、文化の問題である。戦後の日本では、侵略戦争を繰り返すこともなく、戦争はすべて悲惨だとひっくるめて「無罰化」され、一方で過剰な経済至上主義によって敗戦の傷は代償され、人びとは経済的豊かさの追求と会社の発展に再び過剰に同調することになった。そして世界を驚嘆させた経済復興と高度経済成長があり、ついに80年代の日本には、かつてない経済的繁栄と「多幸症」の時代が訪れた。「だが個人を尊重せず、集団に過剰適応しつつ競争心を抱き、上下の関係にこだわる文化はそのままだ。学歴社会があり、有名校があり、会社での肩書への執心があり、そのような価値観を疑う者を不安にさせる圧力がある」<sup>(25)</sup>。それは戦争と戦後を生きた大人たちだけの問題ではない。その大人たちが復興させ成長させた社会に、今の若者たちは生まれ、育てられた。その結果、「感情を抑圧してきた社会の歪みは、若い世代にも続いている。感情交流を拒否し、他者のちょっとした言葉や態度に『傷つく』を連発する青年たち。彼らは深い悲しみと単なる好き嫌いとを弁別する能力さえ持っていない」<sup>(26)</sup>、と野田は言う。

私は、拙著『アイデンティティの社会理論』で、そのような若者の「傷つきやすい」自己が戦後の経済発展と大衆社会化のなかで、どのように構造的に生み出されてきたかを検討した。結論的に言えば、高度経済成長の発展を受け、子どもや若者たちが「負債としての自己」を構造的にかかえ、希薄な現実に浮遊するようになったのは、見田宗介が「虚構の時代」と名づけた1970

年代後半からのことであった<sup>(27)</sup>。それは、高度経済成長という「近代化」の時代（見田の言う「夢の時代」）が終わり、資本主義が消費資本主義へと転換し、人びとが消費文化に大衆的に統合されてゆく時代であった。そして同時にそれは、敗戦から一世代の時間が流れ、戦争の記憶と無縁の子どもたちの自己形成の場が、完成された大衆教育社会のなかで、「学歴社会」に一元化された時代でもあった。これ以降、若い世代は生まれたそのときから、学校化された社会の競争にさらされ、偏差値で評価された「希薄な自己」（「否定された自己」）をかかえて、消費社会の記号化されたモノの世界を「負債」をかかえるようにして浮遊して生きることになったのである。

「戦争は今も続いている」とは野田の言葉だが、こうして戦中以来の「感情を抑圧してきた社会」が新たな社会システムとして完成し、そのなかで「〈感情〉をなくす子どもたち」が構造的に生み出されることになった<sup>(28)</sup>。実際、1970年代後半は、それ以後今日まで続く出生率の低下（少子化）が始まる時期であり、同時に不登校の生徒・児童数の増加が始まった時期でもある。そして、その後の時代は、いじめや校内暴力、家庭内暴力の時代でもあった。たしかに「戦争は今も続いている」とするならば、この時代に生まれ育った若者が「なぜ人を殺してはいけないのか」と問うても、決して不思議ではない。だが、野田の議論によって見てきたように、「罪の意識を抑圧し」、その精神において戦争を続けてきたのは、誰よりも大人たちだったのである。したがってその問いかけは、若者自身が自覚しているかどうかは別として、若者のノン・モラルの地点をはるかに超えて大人たちの精神に突き刺さった。その声は、戦争の罪責を直視することなく、感情を麻痺させて「イノセンスの文化」を戦後も生き続けた大人たちに向かって、その責任を問うところにまで届いているからである。

大人たちが若者の問いにたじろがざるをえない本当の理由は、そこにある。その問いは、前節で見たように、若者がみずからの未来を断念するかのような絶望的なタナトスの問いであるとともに、同時に私たちの社会の感情の歪みを侵略戦争にまでさかのぼって問い直し、そこから戦後を「選び直す」ための、そうした根源的な再生の問いにもつながっているのである。

#### 4. 世界を引き受けるということ——ノン・モラルからの出発

加藤典洋が「敗戦後論」で論じたのは、この戦争と戦後の、意識下に抑圧され隠蔽された「ねじれ」の関係に気づき、その関係を「選び直し」引き受けることによって、抑圧によって生じた戦後日本社会の「人格的な分裂」を克服するという課題であった。その課題は、野田が元兵士の聞き取りから明らかにした課題とみごとに符合している。罪の意識を抑圧し感情を麻痺させてきた人間と社会が、傷ついた自己に気づき、感情を取り戻すこと。しかし、それはどのようにして可能なのか。野田は、「まず知ること」だと言う。「知り、語り合い、さらに感じるという二つの段階を順々に経て、私たちは傷つきうる柔らかい精神を取り戻すだろう」<sup>(29)</sup>というのだ。そのために野田の聞き取り作業が端緒となることは言うまでもない。だが今日、自分の親さえ戦争の記憶のない若い世代がそれに対して「いや、オレは関係ない」と言うとき、いったい若者がこの問

題を考える足場はどこにあるのだろうか。

「敗戦後論」の主張が多くの論争を生んだことは周知のことだが、加藤はその後の論争のなかで「ノン・モラル」をめぐる議論を進めて、ある講演で若い世代の足場をめぐる問題に答えている。「戦後以後」の時代——1970年代以降——に生まれた若い世代について、彼・彼女らが戦争と戦後について考える足場を問うとすれば、それは、その手前にある問題、つまり「社会とつながりのない」若者にとって、そもそも「世界を引き受けるとはどういうことか」を考えることだ、というのがその解答である。芹沢俊介のイノセンス論を導きとしたその講演の副題が、「ノン・モラルからの出発とは何か」であった<sup>(30)</sup>。イノセンスとノン・モラルを対にして、そこに戦争・戦後の問題をからませる小論の構想は、実はブックレットになったこの講演から着想したものだ。

加藤の主張は、要約すれば、1970年代以降に生まれた若い世代にとって、「日本人としての罪の意識」といった罪責感から戦争・戦後問題を考えるのは「二階」から店に入ってゆくような転倒であり、反対に「オレは関係ない」という「ノン・モラル」の発語こそがその起点となる、というものである。つまり、若い世代にとっては「社会とつながりがない」ことが「いま、ここ」という「一階」の問題であり、芹沢のイノセンス論が示したように、そのことが「自分には責任がない」（「無罪＝イノセンス」）としてひとたび表出されなければ、若者は自分から「世界を引き受けること」（「自分には責任がある」）には進めない、というのである。

実は、子ども暴力論として展開された芹沢のイノセンス論と「敗戦後論」の論争にかかわる加藤のノン・モラル論とは、相当にレベルの異なる問題なのだが、加藤はその違いをおそらく意識的に整理しないまま議論することで、論争における自身の立場をより深いレベルから補強しようとしている。『敗戦後論』に収められた別の二つの論考を読むとわかることだが、要するに加藤のノン・モラル論の主旨は、「敗戦後論」を批判する高橋哲哉らの「強い倫理」の主張に対して「弱い倫理」の足場を確保し、共同性の抑圧に対抗して私性から公共性へと抜け出る可能性の問題なのである。実際、論争のなかで加藤は、「汚辱の記憶を保持し、それに恥じ入り続けること」に倫理的可能性を求める高橋の主張に対して、「鳥肌が立つ」と応じた。高橋の「語り口」に、「世界から私的な領域への撤退」を許さない一枚岩の「共同的な語り口」を感じ取るからだ。加藤によれば、そうした「共同性」こそが戦争・戦後の「ねじれ」を抑圧してきたことに起因するものであり、それゆえに戦後日本社会の「人格的分裂」を招いたものだからである<sup>(31)</sup>。

芹沢のイノセンス論が援用されるのも、まずはこの「記憶せよ」という強い声の前に、「そんなことは、知らないよ」というるか後続世代の「無垢（イノセンス）」の声を聞くからだ<sup>(32)</sup>。そのうえで加藤は、イノセンスの表出と肯定（イノセンスの解体）という芹沢の議論を、「肯定ではなくて承認だ」と修正して、イノセンスの表出を発語と問いの承認関係へと、つまり社会性（公共性）の引き受けへと導こうとする。そこには、「倫理を私的なものとする」加藤の一貫した立場がある。今の若者にとって「世界を引き受けるということ」は、いったんノン・モラルの発語によって無実の場所（イノセンス）を確保し、その発語を起点として人との関係を作り、責任を引き受け、社会とつながることだ、というのである。それに対して、高橋のように「日本人として

の罪の意識」から始めるのがなぜダメなのかと言えば、そこではあらかじめ社会性（共同性）が前提されているからである。今の若者にとって「罪の意識を根づかせようとするこの試みは、必ず転倒した形でしか彼らに届かない。「それは、一種の強迫観念となって、彼らの中に生きるしかない」<sup>(33)</sup>、と加藤は言うのである。

私は、こうした加藤の「ノン・モラル」の発語を足場とする「弱い倫理」の主張に基本的に賛成であり、そこで言われる「公共性」と結びついた「世界の引き受け」の可能性を魅力的なものと感じる。とりわけ今日、小林よしのりらが「国＝公」であるとして、「国のために」死ぬるか、という「強い倫理」を唱え、しかも「少女は売春、少年は殺人が流行の国になった」<sup>(34)</sup>として、「日本人としての罪の意識」に訴えかけて、その影響力を若者に増しているとき、加藤の主張の重要性は大きい。だが、残念なことに加藤の場合、イノセンスとノン・モラルの議論の位置関係が未整理のままであり、そのために、そこから見えてくるはずの時代の様相も、そこにある転形期としての現代を「引き受ける」内在的な可能性の局面も見えてこない。

すでに述べてきたように、芹沢が定式化した「子どものイノセンス」という問題は「時代的なもの」であり、具体的には1970年代後半、つまり加藤の言う「戦後以後」の日本社会における時代の危機と転形の可能性にかかわる問題である。一方、加藤の「ノン・モラル」という問題は、結局のところ「敗戦後」の「ねじれ」と「分裂」にかかわる倫理的問題へと帰結する。つまり加藤は「敗戦後」の責任問題に、「戦後以後」の倫理的可能性によって答えを導こうとしているのである。そのことは、『可能性としての戦後以後』という新著のタイトルに象徴されている。だが、そこでは「戦後以後」の可能性と「敗戦後」の問題との内在的結びつきは定かではない。実際、加藤の議論には、ノン・モラルから戦争責任の引き受けへと、つまり「ない、しかし、引き受ける」<sup>(35)</sup>と進むみちすじが期待されるのだが、彼の援用する芹沢のイノセンス論は、世界を引き受けて「一個の人間」になるところで終わる。加藤は、「その後に、戦争責任の問題も出てくるでしょう。しかし、それはもうその人が考えればいいのです」<sup>(36)</sup>、と言うのだが、それは彼自身の求めた結論ではないはずである。

加藤は『可能性としての戦後以後』のなかで、見田宗介『現代社会の理論』と中島梓『コミュニケーション不全症候群』にふれて、それぞれの分析を高く評価しながらも、最終的に、いずれも現代社会の内閉から出てゆくための「内在的なみちすじ」を示していない、と批判した。そのことは、ここでの加藤自身の議論についても当てはまる。では、ここまでの議論をふり返って、本当にそこに「内在的なみちすじ」の可能性がないのかと言えば、けっしてそうではないだろう。野田正彰の著作で見てきたように、現代日本の「イノセンスの文化」には戦争責任の抑圧と隠蔽、加藤の言う「人格的分裂」が内在しており、それが「戦後以後」の問題、「負債としての自己」をかかえた子ども・若者たちの「アイデンティティ危機」を構造的に生み出してきた。その点に戻って言うなら、「戦後以後」の問題には「敗戦後」問題が内在しており、芹沢がイノセンス論で解明した子ども・若者たちの問題には、戦後社会の「人格的分裂」が内在しているのである。そうした問題の煮詰められた表現として、小論では「なぜ人を殺してはいけないのか」という若者の

問いを取り上げてきた。その若者のノン・モラルの問いは、「戦後以後」の「イノセンスの文化」のなかで、まさしく「敗戦後」問題と内在的に、それもきわめて突きつめられたかたちで、出会っているからである。

ここから加藤の修正したイノセンス論に戻ればよい。このノン・モラルの発語が足場となり、そこから始まる世代間の承認の対話が世代にまたがる「イノセンスの文化」を解体し、私たちは文化を選び直し、世界を選び直す——そうした「内在的なみちすじ」が、そこには可能性として見えてくる。野田は、「私たちはその作業ができる時に、ようやく来ている」と、さきの著作を結んでいた。まさに若者のノン・モラルの問いは、私たちの社会におけるそうした対話の作業の呼びかけとして、今や受け止められるべきであろう。

## 註

- (1) 『朝日新聞』1997年11月30日、朝刊
- (2) 『朝日新聞』1997年12月3日、朝刊、および同、1998年1月12日、朝刊
- (3) 拙著『アイデンティティの社会理論』（青木書店、1998年）、183頁以下。なお、「ライフスタイルの政治」と「国家の政治」との関係については、拙稿「国家の政治からライフスタイルの政治へ」（後藤道夫編『日常生活世界を支配するもの』大月書店、1985年）を参照。
- (4) 以下、イノセンス論の紹介・要約は、芹沢俊介『現代（子ども）暴力論』増補版（春秋社、1997年）による。
- (5) 同書、26頁。
- (6) 同書、286頁。
- (7) 『朝日新聞』1999年8月14日、朝刊。
- (8) 『朝日新聞』1999年8月23日、朝刊。
- (9) F・アリエス『（子供）の誕生』杉山光信他訳、みすず書房、1980年。
- (10) 子どもの権利条約 市民・NGO報告書をつくる会編『“豊かな国” 日本社会における子ども期の喪失』花伝社、1997年。
- (11) 加藤洋典『戦後を戦後以後、考える』岩波書店、1998年、42頁。
- (12) 落合恵美子『21世紀家族へ』新版、有斐閣、1997年、60頁。
- (13) 千石保『日本の高校生』日本放送出版協会、1998年、119頁以下。
- (14) 煩雑になるので本文ではふれないが、さらに社会理論上の概念を参照して言えば、ここでの3因子は生活世界（ハーバーマスの概念）の3要素におおよそ対応している。ハーバーマスによれば、生活世界は文化・社会・人格をその構成要素とし、人びとは生活世界を背景とする日常のコミュニケーションによって、生活世界を客観的に構成する文化を継承し（文化的再生産）、他の人びととつながって社会の秩序（連帯）を実現し（社会的統合）、社会の一員として人格を形成する（アイデンティティの確立）。日本

の高校生たちは、この生活世界を引き受けることに失敗しており、言いかえれば生活世界の剥奪の危機にある、ということになる。ハーバーマスに学んで言えば、それが今日、広く見られる日本の若者たちのアイデンティティ危機、中島梓の言う「コミュニケーション不全症候群」の基本的な病理である。詳しくは、拙著『ハーバーマスの社会理論』（世界思想社、2000年）を参照のこと。

- (15) 塩野裕『引きこもる若者たち』ビレッジセンター出版局、1999年。
- (16) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991年、228頁。
- (17) 中島梓『タナトスの子供たち』筑摩書房、1998年、348頁。
- (18) 同書、339頁。
- (19) 芹沢俊介『子どもたちの生と死』岩波書店、1998年、9頁。
- (20) 日本子どもを守る会編『子ども白書 一九九七年版』草土文化、1997年、83頁。
- (21) 深谷昌志『孤立化する子どもたち』日本放送出版協会、1983年、243頁。
- (22) A・ミラー『魂の殺人』山下公子訳、新曜社、1983年、74～75頁。
- (23) 野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1998年、11頁。
- (24) 同書、353頁。今日、「身体は傷ついても、こころは傷つかない」という物言いは、一般に売春や「援助交際」を肯定する議論の定石となっている。それもまた、この感情鈍麻の文化的持続の結果だと言えよう。
- (25) 同書、7～8頁。
- (26) 同書、355頁。
- (27) 見田宗介『現代日本の感覚と思想』講談社、1995年、26頁以下。
- (28) 青木信人『「感情」をなくす子どもたち』青弓社、1992年。
- (29) 加藤典洋『戦後を戦後以後、考える』、356頁。
- (30) 加藤典洋、同書。
- (31) 加藤典洋「語り口の問題」（同『敗戦後論』講談社、1997年）。
- (32) 加藤典洋「戦後後論」（同『敗戦後論』講談社、1997年）。
- (33) 加藤典洋『戦後を戦後以後、考える』、32頁。
- (34) 小林よしのり『戦争論』幻冬社、1998年、297頁。
- (35) 加藤典洋『戦後を戦後以後、考える』、44頁。
- (36) 同書、56頁。